

言語行為論の終焉  
から  
語用論の将来  
へ

土屋俊  
(千葉大学)

# 言語行為論の欠陥

- 1 発語内行為の理論は、言語の使用の一般理論としては、守備範囲が狭すぎる(制度的、慣習的使用のみを扱うだけ)
- 2 文の意味解釈を先行させた理論構成になっている(間接的言語行為という錯覚)
- 3 相互的な行為の理論としては道具立てが足りない(聞き手の位置付け)
- 4 会話的含みなどの理論で補完する余地はない(聞き手の位置付け)
- 5 所詮は、「中間理論」「現象の分類」「出発点」であった

# 言語行為論に代わる真の語用論

- 1 その状況でなぜ言語が使用されるのかを説明すること(言語補完説 言語自律説)
- 2 その状況でなぜその言語断片が使用されるのかを説明すること(断片的漸増的意味論)
- 3 使用された言語断片がどのような役割を持ったかを説明すること(語用論本体)
- 4 そのような役割をその断片が持ち得るのなぜかを説明すること(過去の言語学)

# 真の語用論はもはや語用論ではない

- 1 Syntactics(Syntax), Semantics, Pragmaticsという分類は、この研究の順序を想定していたが、真の語用論においては、そもそも、この順序が逆転する
- 2 真の語用論は、言語の使用の理論であり、Linguisticsである

# 言語使用の理論の今後の課題

## 1 社会的な言語使用 (コミュニケーション)

社会性

可能性、能力ではなく現実の姿

語の一次性 (専門用語なども)

メタファー、間接的言語行為の一次性

## 2 オンライン (音声) 言語の実態の解明

正書法、音標文字以前のデータ

意図と注意の構造

## 3 オフライン (文字) 言語の意味の解明

知識の媒体としての言語

文書の構造

# なぜこれらが課題か ー過去からの外挿ー

1 20世紀文優先主義の「完成」と「行き詰まり」

「語」レベルの探究

「談話」レベルの探究

2 「言語行為」の多重性

3 生物学主義の限界

本質的な社会性の説明

言語使用の主体は個人ではない

# 気にしなくてもよいこと

## 1 脳

言語的事実の新発見は期待できない

## 2 社会言語学

もはや言語学は社会言語学でしかありえない

## 3 文法

存在は説明の課題であり前提ではない

~~プラグマティクス~~

# 井上さん

- 1 解釈(形而上学的か事実的か)
- 2 phatic communionの位置付け
- 3 Grice、Gumperz、Levinsonによること
- 4 定式的表現への態度(挨拶と明示的行為遂行動詞)
- 5 出発点をinfelicityとするのか(それならGriceでいいのでは?)
- 6 身体的共感とコミュニケーション
- 7 文化

# 飯田さん

- 1 論理的(?)でない発話の存在—当たり前前ではないか
- 2 primitive/frank-candidは幻想？
- 3 「さとし ボール おいしい」  
「おいしい ちょっと すっぱい」  
これらは1語？
- 4 J. L. Austinでは、今の間接的言語行為は、Primitive Actとされた。なにがそれをその行為にするのかという問題
- 5 Learningはちょっと難しいか？